

製絲部

岡本榮一氏

紡績部

山内龍一氏

蠶絲化學實驗室

山下忠雄氏

遠藤正壽氏

明年度から製絲科では、社會の要求に應じて現在の業手制度を燒き直し教婦養成科の新設を目論み中である。開校當時小指ほぎだつた、櫻樹も、十数年の年月を経て近頃では 直徑一尺五寸位となり枝振り面白く咲き出した。

高橋清七先生は此の三月限り退職せられた、長く本校のために御盡瘁下さつた先生に、心から敬意を表し御健在を祈つて止まない。

櫻の花が散つた世は青葉の海に化した、本校の活動は之からである。

學窓だより

一村一町は、いや國を擧げて不景氣を叫び合つて居る間にも大きな自然はその重い、だが何萬年の昔より正しく歩みつづけた足取りで、又花咲く春を私達の學校にも展開し始めました。いくら貧乏しても不景氣でも、春が來ればどこか氣軽くなつて、花でも咲けば唄の一つも出したくなるでせう。

そうして今年こそ景氣挽回だ、龍の年だミカんで居た折りも折り、櫻の花に雪が降つた。桑の芽がひつこんで仕舞つた。百姓はちぢみ上つた、そして商人達は勿論深く溜息を吐いた。何の因果かこの學校へ入つた以上、市のサイレンが二回鳴れば明日は霜だと思はなければならぬ。

此の頃の學生は花に雪が降り青葉に霜がおかれるのを、調子外れな陽氣だ等云つては居られないのです。

測候所で霜が来る等と間違にしろ豫告したなら、缺點でも取つた位な心配はせねばならない。桑の芽が、みぎりに柔らかくのびて行く。だがそれが楽しみだか、心配なのだかはつきり解らないと云ふのだから皮肉だ。霜だ！、等と夜中に飛び出して夢かき氣の付いて胸を撫で下すお百姓の話しも無理はない。

先輩諸兄が遠くから見て居るご、學校は至極穩かに見えるでせう。いやそれどころか見様に依つては、學校では一體何をやつてるんだらう等と、齒がゆくも思はれる事です。だが遠くから見れば白煙を、春の空に靜かになびかせて居る淺間のお山も、噴き口まで行けば相當凄ひ活躍をして居ます。母校だよりの方にのつてゐる様ですから、折り返しては書きません。が兎に角、霜が降るなら仕方がない。だが仕方がない、だけでは男でない。有史以來の好景氣も自ら唱つてゐる、アメリカのモダンガールも、締契して生絲の需用の増加を期さんご、劃策する遠大なる(?)理想家もないではありません。

今度佛蘭西にお出でになる和田先生に、生絲の需用増加に骨折り下さる様に、お願ひするのも亦望まない事ではない——日本の生絲をお用ひなさい。人絹に優る事、將に數倍です——ご。校友一同先生の、御健在を祈つて止まない。

養蠶部では全員擧つて活躍を開始しました。長い冬中忘れられた様に閉ぢられてゐた、蠶室が開放された。外れたホースから水が飛び出す、窓先に垂れた柳の芽が青い。

二階建蠶室さ向ひ相ひの實驗室(今は動植物實驗室)の西に、防火壁が造くられた。万一の場合の備へです。

製絲部も新しい器械を据付けて、折りからの參觀人の訪問に新しい先生達、大いに活躍してゐます。先に立つ人が若いから、何處か皆んなも潑刺さした、元氣に満ちてゐます。

校庭のクローバーも、みぎりに萌て校友各部の猛練習が開始されました。阿形先生のお骨折りで校庭の面目一新です。今年こそはご意氣込んだ、野球部の練習は涙ぐましい程です。庭球部、卓球部は全盛時代。柔劍道に至つては將に黄金

時代。先輩諸兄のお力添へさ、相待つて益々その發展活躍を期す覺悟であります。

○

みざりに崩えて行く、見渡す限りのクロロフィルの桑園の中に、美しく立つ絹絲科學部では、井上先生始め古谷先生金子先生の研究が、つづけられて居ます。

小さな蠶の吐き出す、美しい絹絲に依つて上田の蠶絲専門學校は各部共に足並揃へて、蠶絲業改造への確實なる歩を進めて居ます。

最後に先輩諸兄の、御健康を祈つて筆をおきます。

(五、五、夜、 絲三 正木生)